

タイトル	三島文学のグローバル化 : あるいはその研究と展望
著者	テレングト, アイトル; TERENGUTO, Aitoru
引用	北海学園大学人文論集(51): 61-74
発行日	2012-03-30

三島文学のグローバル化 — あるいはその研究と展望

テレングト・アイトル

一、

三島由紀夫の作品はその生前、十三歳に注目を浴び、十六歳にすでに高く評価されていた。後ノーベル賞候補者にノミネートされたことがさらに彼の知名度を高め、とりわけ世界を驚かせた一九七〇年の衝撃的な自決がきっかけで、その作品は世界的に注目され、広く読まれるようになったのである。一九七〇年以降、世界の各言語に翻訳される作品数が徐々に増え、国連教育文化科学機関（UNESCO）の翻訳点数の統計データによると、現時点で二八九点も翻訳され、その数は川端康成、大江健三郎と村上春樹をも超えており、世界において日本のイメージを形作った、最も知られている代表的作家である¹。実際、三島は単に世界において翻訳数、読者数を獲得したのではなく、日本のどの作家よりも多く、各国の現代の重要な作家、芸術家をインスパイアした作家でもある²。

日本では、その生前から議論の多い作家で、その自決後「三島由紀夫とは何であったか」といったような問いかけが世に繰り返してきたが、とりわけ文学研究雑誌に特集号として何回にわたって取り上げられてきた。しかし、そういった研究の数が重ねられてきたにもかかわらず、四〇年間の時を経たいまもなお、世界においてだけでなく、日本においてすらその作家と作品がなお「謎」に近い存在とされている。

一九七三年から一九七六年にわたって『三島由紀夫全集』（集英社、三五巻＋補巻）が刊行されたが、それを背景に、短期間に数多くの評論・研究が生み出された。一九九九年、富士山の麓「山中湖文学の森」において三

島由紀夫の総合的な研究拠点である「三島由紀夫文学館」が創設されたが、それが契機となって、新たな資料と創作ノートなどが収集され、さらに二〇〇〇年から二〇〇六年、集英社による『決定版・三島由紀夫全集』（集英社、四二巻＋補巻＋別巻）が出され、いわばデジタル・音声・映像メディアを駆使した一大プロジェクト（年譜・書誌・索引のCD、音声CDと映画DVD）が完成されたとみてよい。同時期に延べ一五六名の専門家によって執筆され、最新の研究を反映した『三島由紀夫事典』（二〇〇〇年）、『三島由紀夫の時代』（二〇〇一年）、『三島由紀夫の表現』（二〇〇一年）、『世界中の三島由紀夫』（二〇〇一年）が勉誠出版によって刊行される。また、三島由紀夫生誕八〇年にあたる二〇〇五年『三島由紀夫研究』（鼎書房）という、特定の作品を取り上げて、ジャンル毎にその証言・記憶の記録と資料発掘を目的にした専門雑誌が年間二回刊行でスタートをきり、文献書誌の収集・整理・保存だけではなく、三島の人物にまつわる社会的、政治的、文化的、芸術的、ありとあらゆる人間関係にかかわる資料、エピソード、インタビュー、オーラル・ヒストリー、対談など、様々なかたちで専門の研究者らによって精力的に蒐集・収録されてきた。そして2000年前まで三島文学を取り組んだ研究者・批評者は、日本だけで延べ千人を超え、主要研究文献もゆうに一万件以上だったが、その後さらに増えつつあり、とりわけ現代作家のなか、これほど系統的に膨大な研究（とくに文献書誌）・評論が蓄積されてきたのは珍しい。しかし、それにもかかわらず、三島という人とその文学は未だに「謎」に包まれたままである。

そもそも「三島由紀夫とは何であったか」。この問いかけは、その自決後、時間が経つにつれ、三島由紀夫という一私的個人から、あるいは一個人の文学的な「特殊な現象」から徐々に止揚され、さらに日本の一作家の文学から昇華して、むしろ人間の自己認識への一つの深刻な問いかけとして日本のみならず、各国の研究者たちに強く意識されるようになってきたといえる。

二、

アジアにおいて三島文学が比較的早く受容されたのは台湾である。一九六〇年代から作品が翻訳され、作品の翻訳数と批評・研究が七〇年代から八〇年代にわたって急増し、八〇年代末まではピークに達したといえる。大陸中国はそれに追いつこうという勢いを呈し、八十年代末から九〇年代初期に翻訳と共に批評・研究も急速に増え、九〇年代半ばで一段落をした。そして韓国においては、早くも六〇年代初期には三島の個別の作品の翻訳が出版されたが、日韓関係における特殊な政治的な要因により台湾と中国に比べれば、いささか遅れをみせ、アカデミックな批評・研究は九〇年代になってからのこととなる。しかし、台湾・中国・韓国、それぞれの地域と国は戦前日本によって負の歴史を被られてきたせいで、三島に対して、決まって「右翼・武士道・天皇崇拜」などのような政治的なレッテルを貼り、異口同音にして批判的であったものの、翻訳作品数は、一九七〇年初期までに韓国と台湾において、いずれも日本現代作家のベスト5に入るほどであった。三島文学を政治と結びつけて批評する傾向が強かったのは中国で、その次は韓国、そのなか台湾はもっともリベラルに受容している面を呈している。その代わり、九〇年代初期から中国において翻訳された三島作品シリーズは、三島文学が外国において受容されたもののなか、規模と作品数において最も多く、台湾と大陸を合わせれば、中国語に翻訳された作品数が、欧米を凌いで世界で最大の受容地域に数えられる。

ところが、欧米での三島文学の受容は、一九七〇年三島切腹事件によって一段と高まったものの、その受容のきっかけ、経緯ないし受容の仕方、あるいは注目したジャンルやそれによる影響などにおいて、アジアとは違う様相を呈している。事実、三島文学が英語圏に翻訳され、紹介されたのは、アジアより一〇年も早く、最初に翻訳されたのは『潮騒』（一九五六年）と『近代能楽集』（一九五七年）で、受容一般において、三島の小説よりも戯曲・演劇のジャンルの方が先に評判になったのである。それを仕掛けたのは欧米受容のパイオニア的な存在で、かつ三島の親友になるドナルド・

キーンである（しかも英語圏での三島作品の翻訳・紹介・批評は、まず三島本人の友人・知人たちから始まったのが興味深い）。その傾向が欧米の受容において一種の方向付けをしたのか、アジアにおいて殆ど注目されなかった戯曲・演劇のジャンルが欧米で歓迎され、主としてまず演劇性の高い作品から受容されていったのである。一九五七年『近代能楽集』の翻訳が刊行されるとともに、欧米での上演も始まり、一九六〇年のオフ・ブロードウェイ公演が二ヵ月も続演されたという。同じくキーン訳の戯曲『サド侯爵夫人』も評判になり、一九六七年英語からさらにフランス語に訳され、本場パリの舞台でも喝采を浴び、一九七七年から七八年にかけてルノオ・バロオ劇団が『サド侯爵夫人』を長期にわたって公演し、その劇評にはラシーヌにも劣らないと絶賛したのもあったというほどであった。その延長上で『金閣寺』、『午後の曳航』などはオペラとしても公演され、『午後の曳航』はまた映画化される。こうして三島の作品はアジアでの受容とは違って、欧米では戯曲・映画・演劇・バレエ・パフォーマンス芸術などのジャンルにおいてより広く知られ、とりわけバレエに革命的な変化をもたらした巨星モーリス・ベジャールによって三島をテーマに演出した数々の舞踊劇は、欧米では広く知られ、かつ高く評価されたのである。

三、

アジアにおける三島文学の研究・批評は、台湾が最もイデオロギー的に左右される度合が薄かったと言ってよい。陳孟鴻、李永識、林水福など日本学の中堅の研究者によって批評・研究されてきたが、三島自死の時点において、日本内外には「軍国主義者」「武士道」の復活や「文人の政治参与」「美学の問題」「異常者」などの諸説が交錯していたなか、陳孟鴻はそれらがいずれも表面的だと批判し、その文学と死の本質である「虚と妄」は、「三島自身ですら描出できかねる」ことであり、結局それは実際の死をもって答えるしかなかったと批評していたが、その見解は四〇年の時を経た現在、むしろ主流的な見方として浮上しつつある。台湾の批評・研究はシャー

ブな面があり、三島をテーマにした数多くの良質の修士論文を産出してきたものの、纏まった三島文学研究の専門書はまだみられていない。それに対して、大陸中国は、特定の政治・イデオロギーに制限されながら、葉涓渠、唐月梅、李芒などによって研究が進められ、とくに唐月梅の『怪異鬼才・三島由紀夫伝記』(一九九四年)と、中・日・米共同に編集された『三島由紀夫研究』(一九九六年)は三島文学研究の成果として最大値だったといえる。韓国は一九九〇年代に入ってから日本をタブー化してきたことを改善したが、そのなか三島文学研究のスタートが遅かったにもかかわらず、二〇〇〇年以降は、量的にも質的にも目まぐるしい発展を見せ、「政治的な問題より三島由紀夫の作品そのものに注目する傾向があり」、その間二篇の博士論文が提出され、学術論文も続出している³。

欧米における研究・評論は、まず評伝のジャンルにおいて英語圏から一九七一年、ドナルド・キーンの研究「三島由紀夫」⁴が先鞭をつけ、一九七四年、ジョン・ネイスンによる博士論文『三島由紀夫の人と作品』⁵が提出され、のち『三島由紀夫 — ある評伝 —』⁶として出版される。またヘンリー・スコット=ストークスの『三島由紀夫・死と真実』⁷(一九七五年)と、三島の自死を歴史的背景から解釈するアイヴァン・モリスの『高貴なる敗北』⁸(一九七五年)も相次いで刊行され、そういった良質な伝記研究・歴史研究が本国日本をも凌ぐほどであった。また英訳からフランス語に『近代能楽集』の抜粋を訳したマルグリット・ユルスナール(現代フランスの代表的な文学者の一人)も『三島あるいは空虚のヴィジョン』⁹(一九八〇年)を刊行したが、これらはいずれも三島という人と作家に着目してその核心に迫ろうとした成果である。そういった伝記的なアプローチではなく、早くも作品を中心に初めてテキスト分析をしたのは、のちのドイツの日本学の第一人者イルメラ・日地谷=キルシュネライトである。日本を始め、欧米までも、三島の文学作品というよりも、三島の人物とその行動自体に惑わされ、こぞってみな伝記に明け暮れていた時代、キルシュネライトの博士論文『三島由紀夫小説〈鏡子の家〉の間テキスト的な分析の試み』¹⁰は、もはや文学研究における本来のもう一つの王道を三島文学研究において切

り開いたのである。それは日本国内にとってはもちろんのこと、欧米においても、当時画期的な出来事であった。以来欧米において三島文学にまつわる博士論文が継続的に生み出され、主として三島とその作品にまつわる哲学・政治・思想・美学的・精神分析的・倫理的・歴史伝統と、欧米の文学との関係において研究され、作品へのアプローチとして、理論的な整合性に長けているのが特徴だと言える。そのなか、例えばロイ・スターズの博士論文『仮面とハンマー——三島小説におけるニヒリズム』¹¹（のち『死の弁証法——三島由紀夫の世界における性・暴力とニヒリズム』¹²として出版される）は、作品を中心に、人物・伝記をも参照して、三島文学における哲学・心理学・倫理及び政治学の諸レベルから構造的にその「エッセンス」を明らかにしようとした力作である。総じて言えば、日本において「難解」とされてきた三島とその文学は、欧米の理論と方法論のフレームワークにおいて逆に理解し易い部分があり、作家と作品、またそれにまつわるさまざまな分野のアカデミックな取り組みには明確なジャンルと整合性が求められた一方、西欧の文学研究のコンテクストにおけるアンチ伝統か、ポスト・モダニズムなどのアートにも取り込まれて、その文学のラディカルな反転性が鑑賞されてもいる。実際、ジョン・ネイスン以来、ごく最近まで、英米仏独の博士論文はトータル凡そ二〇篇にも登る。

四、

日本における三島由紀夫の研究、理解と解釈には、一種のカオスだともいえる現象がみられる。三島を「神」として崇める者がいれば、背徳として嫌悪する者もいる。その文学を時代の象徴か、愛国の象徴、あるいは文学の敗北の象徴として信じたり、あるいは人間の一種の特殊な愛の表象か、ニヒルの表明か、もしくは日本文化の象徴だなど見做したり、あるいはむしろその作品を空虚と無の象徴だと捉えたりして、三島文学に対する見方は、根本的なところですら共通認識が見つかり難い。その批評と研究にはありとあらゆるものが混合して存在している。したがって、三島の自決

から今まで研究分野において主として問わざるをえなかったのは、「三島由紀夫とは何であったのか」という総合的、全体的にかかわる問いかけであった。もちろんそういった問いは、三島由紀夫その人物と文学を分けずに問いかけてきたことになり、それによって三島文学作品それ自体の文学性・自律性への探究が疎かにされてきた傾向が避けられなかったと言える。

事実、三島文学だけは日本文学史ばかりか、世界文学史においても奇異な存在で、その作品と行動の高度な一致性を見せたのは、口承文学の語部を除き、いまだかつて類例を見ない現象である。研究者の誰もがそこに隔靴搔痒の感に駆られるのは避けられない。とりわけ三島に近い世代か、三島が生きた時代を、身を以て生き、感じた日本人にとって、三島は、どうしても一個の生の一人の、親しげで、かつ身近な人間しかなかったのである。そして三島の友人らでさえ、三島の自決後、裏切られたという感がなくもない。そういった複合的な感情に絡まれてしまったせいか、研究者を含め、多くの日本の論者は、一定の距離を置いて客観的にその文学を捉えることを拒んできた傾向があり、世にも稀な作品を編み出した創作者よりも、むしろ親しげな隣人の三島として見ようとする傾向が濃厚に見られる。そういった現象について、三島の書誌・伝記研究の第一人者松本徹は、一〇年も前苦しげに、次のように読者に告げる。

三島由紀夫が自決してから、すでに三〇年が過ぎた。しかし、いまだに彼の行動は謎に包まれたままだと言ってよかろう。もっとも三島自身にとって、その行動は、謎でもなんでもなく、思うところを果敢に行なった結果に過ぎない。それにもかかわらず、われわれは、いまだに謎を見つづけている。いや、さらに謎を膨らませるのに精を出しているような気配である。なぜなのか？ もしかしたら、謎を見つづけることによって、三島がわれわれに突きつけている問題を直視するのを避けているのかもしれない。正面切って取り組むよりも、謎の領域へ押しやって置くほうが、われわれには好都合なのであろう¹³。

実際、このような状況は三島の自決から今日まで、四〇年経っても一向に変わっていない。

事実、今まで三島由紀夫研究において、大きな三つの傾向が見られよう。その一つ目は、三島由紀夫人物・作家およびその作品資料・書誌についての収集・整理と注釈は、他の現代作家に比べれば、量的に多いにもかかわらず比較的徹底されていること。二つ目は、三島由紀夫という作家人物の伝記・評伝が大量に生み出され、その伝記・評伝に注目するあまり、その文学それ自体の研究が疎かにされ、もしくはその文学作品について批評・研究さえも作家・人物の解明に重点がおかれてきた傾向がある。すなわち、多くの批評・研究は三島という作者・作家の創作動機、創作経緯、創作心理、生活・体験の真偽、人間関係、創作の背景とその創作の達成度などを理解するためか、解釈するためのものであり、強いては、作品研究ですら作者を理解するための道具か方便となっている傾向がある。いうなれば、作品研究の主とする目的、あるいはその着目する重点は、作品それ自体にあるのではなく、作家・人物を理解すること、解釈することにおかれ、伝記研究に傾いてしまうものが主流である。三つ目は、総じていえば三島についての総合的批評か、あるいはその批評のメタ批評であろう。この領域における批評は、人（さまざまなパフォーマンスと行動など）と作品（文学作品、フィクションと政治論評ないし対談、手記など）と読者（さまざまな読者層）などを分けずに、それら全体を総合的に捉えようとするものであろう。実証的な伝記研究や評伝を除き、殆どこの類の批評となる。言ってみれば、言説・メディア一般において三島全体を解説し、理解しようとする総合的な批評である。例えば、三島文学の知の射程距離は元来遠くて広く、作品の原材がギリシャ古典から『旧約聖書』、インド仏教、ヒンズー教ないし中央アジアの文学までに及ぶ。とくに近現代の欧米文学の影響によって生み出された作品が多く、単にその主要作品の題材の数から言っても、日本か中国の伝統的な題材よりも多い。しかしそれにもかかわらず、実際、日本内外を問わず、三島こそ生粋の日本文化の後継者だと一般的に批評は見てきたのである。その一方、そういった批評とは対立した見方も

顕著で、真っ向から対峙して、「三島由紀夫は、私小説、風俗小説中心の従来の日本の文壇作家とは違って、むしろ西洋的な新しいタイプの文学者であり、(中略)戦後の文学の主流的思潮とはどこか異質であった」¹⁴とか、「三島由紀夫は、それまでの日本文学にとって、ぜんぜん異質の文学者であった。(中略)在来の小説を見なれた眼に、三島の小説がマガイモノと映ったのは当然であった」¹⁵というように批評され、対立した両者の見方は交わりなく平行したままでいるのが普通である。そしてその作品の原材についての研究は殆ど手が付けられずに、両者の見方をさらに批評するというメタ批評が増え、作品研究ではなく、伝記研究だけに基づいてメタ批評が増幅した傾向がある。その傾向に気づいたか、それを乗り越えようと、専門研究誌『三島由紀夫研究』の共同編集者が発刊号において、その刊行主旨につき、次のようにいう。

さらに視野をひろげ、多角的、柔軟に、恣意に陥ることなく、考究することが必要である。一定の立場に囚われず、いわゆる作家研究の枠からも自由に、各国の言語、文化の違いを深く認識したうえで、その障壁を越え、推し進めなくてはなるまい¹⁶。

たしかに、「作家研究」という既存の枠組から如何に自由になるかが重要な課題となっており、本格的な作品研究が期待されているのであろう。事実、三島の作品それ自体に注目して分析し、その文学性、芸術性、あるいはその仕組み、構造を解明しようとする研究は、作家を中心とする研究に比べれば、わずかなものしかない。したがって現在まで大量に蓄積されてきた評伝研究や批評の批評となるメタ批評を前にして、今や期待されているのは、「作家研究の枠からも自由」になる「作品研究」であろう。

実際、総合的な批評とメタ批評について、どの作家・分野においても盛んに行なわれることだが、しかし三島文学においては、事情がたしかに違ってくるのも理解できる。というのも、三島文学ほど言語と人間、文学と人間との関係において既存の価値観を逆転して、転覆するようなものは少な

い。したがって彼の人間それ自体を理解し、解明するのはきわめて重要な課題になるに違いない。しかし、同時に彼の作品ほど歴史・文化・社会・政治を越えたところに絶え間なく文学・芸術を主張したものもまた少ない。その作品は一見恰も歴史時代・文化背景・社会変遷・政治変化・信仰宗教などに根付いて生み出されたように見え、またそのように読まれようが、しかしまさしく具体的なリアリティにおいては、そのリアルな諸点がみごとにまたはぐらかされ、実際のリアリティを越えたところに文学・芸術の真価を求めており、それによって現実の歴史・社会・政治・宗教などが戯れられてしまい、万華鏡のように回転によって様相が変わり、視点を変えればそれらの作品は、まったく別の様相を呈するのである。したがって、三島文学にこそ、作家についてのメタ批評か、現代の作品同士の類似性が相違などを指摘するような論評で足るのではなく、さらなる作品自体への問いかけ・研究が要請されよう。

事実、三島文学は、きわめて独自の構造的な特徴ないし仕組を有しており、それが日本文学史ばかりか、漢字文化圏全体においてもいまだかつて見られなかった新たなバリエーションで、かつまた文学的に人間を凝視するといった行為において、それは他に取って代わることのできない、特異な文学的、芸術的な語りと視点を呈示したのである。その作品の高度な構造化、組織性、隠喩性は三島自身が少年の十三歳時から完成しており、それが彼の自決までも一貫していたのである(拙著『三島文学の原型——始原・根茎隠喩・構造——』を参照)。しかし、そもそも三島はその構造的・整然とした形式・しくみをその作品のすみずみまで計算して、後々に書かれるだろう様々な作品までも配慮し、そして自分の生の身体までも作品と同じように、自ら死を迎えるように仕掛けたのであろうか、それはとても考えられない。しかし、作品自体の構造的な特徴は、いみじくもそれを明確に表示しているのである。それは一体何よっての仕掛け・しわざなのであろうか。言い換えれば、三島文学において、いったい文学創作という人間の想像・模倣(ミメーシス)する行為そのものが、作者をその論理・しくみの中にかからめ取っていったのか、それとも作者が想像・模倣することにお

いて、そうせざるをえなかったのか。いうまでもなく、これらの問いは、人間と文学との根本的な問題にかかわっており、生死と文学との関係をめぐる根本的な命題に突き付けているのである。まさにその点において、三島文学は今までの写實的・リアルな記述・表現を素朴に信頼してきた文学観を揺さぶっているのである。まさにそれ故か、三島文学を取り組む多くの実証的な文学研究とメタ批評は、逆にその自身の無力さと浅はかさを露呈させられているのである。

五、

もし文学研究の諸目標を集約して、究極的にそこには鑑賞と認知という二つの側面があるとすれば、三島文学研究において、いまや必要とされるのは、鑑賞という目標を満たす批評とメタ批評でもなければ、文学の周辺研究（歴史・社会・政治・宗教・イデオロギー・心理学などを解明するための資料・サンプルとしての文学研究）にとどまって三島文学それ自体を推測することでもない。というよりむしろ今までの堅実な文献書誌注釈と、豊富な伝記研究に基づいた、作品の緻密なテキスト分析が必要とされ、認知という目標に向かって哲学、諸文学理論と概念によってその迷宮を明らかにすることが要請されているのであろう。というのは、三島文学ほど微細な言葉の修辞から全作品の構造まで、また一個人の欲望から人間全体の世界観まで渉猟し、言い及ぼした隠喩的な作品はない。その文学は仏教・哲学の諸命題を呈しながらも見事にまた文学作品として構成され、そこには認知に値する快樂と危険が豊富に織り込まれているのである。その「謎」を解明するには、方法論に基づいて作品のテキスト分析をすることが最も有効な直近の主要な方途であろう。

とりもなおさず、その作品群を紡ぎ出した歴大なメタファー（事実、隠喩辞典類においても確認されたことだが、三島作品のメタファーの量が近代日本文学史においていまだかつてなかった）と、そのメタファーによって錯綜させ、複雑かつ巧みに織り出されたダイナミックなメタファーの

ネットワークを解きほぐさねばならない。従って、そのメタファーによって織りなす物語世界がどのように別の深遠なる世界を比喩して呈示し、リアリティの世界と物語世界との拮抗・対峙・対立を構成しているのかを説明することであろう。というのも、もしも三島の巧みに編み出したメタファーと、そのメタファーによって構成されたしくみをその作品から削除するならば、あるいはそれらのメタファーを素朴なりアルな記述・表現に戻せば、三島文学の魅力が忽ち消え失せ、そこに残るのはバラエティに富んだ批評の言説のみであろう。というのは、読者のだれもがその作品を通じて会得することだが、もしいったんそのメタファーの迷宮に入ってしまったら、その絢爛さと錯綜ぶり、様々なパラドックス、アンチノミー、パロディ、象徴、アレゴリー、諷刺、アイロニー、逆転、倒錯、入れ子構造、過剰な遊戯、豪華かつ過剰な装飾などを楽しむか、あるいはその文学的な戯れに振り回されてしまうことであろう。冴えたときの三島は、文字通りまるで手品師のように、物語を自由自在に操り、読者の読みを熟知したばかりか、研究者・評論家の手口までも予知し、とりわけ今までの人間の性・死生観・存在についての諸徳目を戯れながらはぐらかし、かつ用意周到にストーリーとして紡ぎ出しているのである。それらのメカニズムについての説明はいまだにわれわれの前に立ちはだかっているのである。

現在まで「三島由紀夫とは何であったか」という総合的な問いが主流で、それが応答され、そういった研究は実り多く、かつ今後も期待される。しかし「三島由紀夫の文学とは何であったか」という文学それ自体に対する問いに応答する体系的な研究はいまだに少ない。そのなか、テキスト分析を三島文学初期作品に応用した筆者の試み¹⁷を除き、最近、木谷真紀子の『三島由紀夫と歌舞伎』（翰林書房、二〇〇七年）、杉山欣也の『〈三島由紀夫〉の誕生』（翰林書房、二〇〇九年）、有元伸子の『三島由紀夫・物語る力とジェンダー——〈豊饒の海〉の世界』（翰林書房、二〇一〇年）などがあり、いずれも緻密な分析か、テキスト分析の作業を通じて三島文学を理解し、解釈し、解明しようとする基礎的な研究である。今後の展望として、そういったテキスト分析はもちろんのこと、加えて読者論も大いに期待さ

れよう。

註

- 1 <http://databases.unesco.org> UNESCO のデータベース, アクセス: 2011年3月6日。
- 2 イルメラ・日地谷=キルシュネライト「世界の文学と三島」『三島由紀夫の知的ルーツと国際的インパクト』昭和堂二〇一〇年 (125~140頁)。
- 3 洪潤杓「韓国における三島由紀夫の受容」イルメラ・日地谷=キルシュネライト編『三島由紀夫の知的ルーツと国際的インパクト』昭和堂二〇一〇年 (191~192頁)。
- 4 Donald Keene “Mishima Yukio” *Landscapes and Portraits: Appreciations of Japanese Culture*. Kodansha International Ltd, 1971.
- 5 John Nathan *The life and Works of Yukio Mishima*. Harvard University, 1974.
- 6 John Nathan *Mishima: a Biography*. Hamish Hamilton, 1975. 野口武彦訳『三島由紀夫 — ある評伝』新潮社, (初版一九七六年) 二〇〇〇年。
- 7 Henry Scott Stokes *The Life and Death of Yukio Mishima*. Peter Owen, 1975. 徳岡孝夫訳『三島由紀夫 — 死と真実』ダイヤモンド社, 一九八五年。『三島由紀夫 — 生と死』清流出版, 一九九八年。
- 8 Ivan Morris *The Nobility of Failure: Tragic Heroes in the History of Japan*. Secker and Warburg, 1975. 斉藤和明訳『高貴なる敗北 — 日本史の悲劇の英雄たち』中央公論社, 一九八一年。
- 9 Marguerite Yourcenar *Mishima, ou, La Vision du Vide*. French & European Publications, Incorporated, 1980. In English *Mishima: a Vision of the Void*. Translated by Alberto Manguel in collaboration with the author. Farrar Strauss, and Giroux, 1980. 澁澤龍彦訳『三島あるいは空虚のヴィジョン』河出書房新社, 一九八二年。
- 10 Irmela Hijiya-Kirschner *Mishima Yukios Roman “Kyoōko-no ie”*: Versuch einer intratextuellen Analyse. Ruhr-Universität Bochum, 1976.
- 11 Roy Starrs *The Mask and the Hammer: Nihilism in the Novels of Mishima Yukio*. University of British Columbia, 1986.
- 12 Roy Starrs *Deadly Dialectics: Sex, Violence and Nihilism in the World of Yukio Mishima*. Japan Library, 1994.
- 13 松本徹『三島由紀夫の最後』文芸春秋, 二〇〇〇年 (5頁)。

- 14 奥野健男『三島由紀夫伝説』新潮社，一九九三年（12頁）。
- 15 本多秋五『物語——戦後文学史』（Ⅱ）岩波書店，一九九二年（99頁）。
- 16 松本徹，佐藤秀明，井上隆史編「刊行にあたって」『三島由紀夫研究』（第1号）鼎書房，二〇〇五年。
- 17 テレングト・アイトル『三島文学の原型——始原・根茎隠喩・構造——』（日本図書センター，二〇〇二年）。